OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	「朝日新聞」西部版学芸記事細目（一九四六年三月～一九四九年一二月）
Author(s)	斎藤, 理生
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要. 2022, 62, p. 67-92
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/87427
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

「朝日新聞」西部版学芸記事細目（一九四六年三月〜一九四九年一二月）

斎藤理生

本稿は、一九四六年三月から一九四九年一二月までの「朝日新聞」西部版の学芸記事の題目と執筆者とを記載したものである。

戦時下から占領下にいたる時期、日本ではさまざまな物資が不足していた。新聞も紙不足のため紙面を減らさざるを得なくなり、一九四六年の時点では、通常は表と裏の二面のみで発行されていた。いきおい多くのコンテンツが切り捨てられた。未曾有の混乱期にあって、衣食住に関わる情報が優先されるなか、学芸記事は載りにくくなった。「朝日新聞」の場合、連載小説は一九四五年三月六日をもって中断していた。その復活は一九四七年六月八日（西部版では九日）まで待たねばならなかった。

とはいえ、学芸文化に関わる記事がなくなってしまったわけではない。それらの記事は、わずかな紙面のなかに楔のように打ちこまれている。それは敗戦直後に「文化国家」を目指す気運が高まると共に、多くの人々が、政治、経済、社会以外のコンテンツも求めていたことの証左でもあろう。極限状況において、人々はどのような紙面を求め、新聞社および執筆者たちはいかにそれに応えたのか。

ここで注意したいのが、今回とりあげる西部版は、東京版や大阪版と多くの記事を共有しつつ、一部異なる紙面を展開していたことである。それら地方版だけに載った記事は埋もれやすい。今回、調査資料は「朝日新聞記事データベース　聞蔵Ⅱ　ビジュアル」を用いたが、このデータベースは検索機能を備えるものの、洩れてしまう記事も少なくない。また、東京版の記事はヒットしても、地方版の記事はヒットしない。ところが、その地方版に重要な記事や作品が掲載されていることがある。拙稿「《研究ノート》「けし粒小説」とその時代――敗戦直後の「朝日新聞」大阪版および名古屋版の創作欄」（「阪大近代文学研究」二〇一八・三）および「発掘・坂口安吾「復員」

とその背景」（「新潮」二〇一八・四）、「解説・三島由紀夫「恋文」の位置」（「新潮」二〇二一・五）などから明らかなように、詳細な書誌が作られている高名な作家が「朝日新聞」のような著名な媒体に発表したにもかかわらず、見逃されてきた作品があったのである。

その一つに、林芙美子の掌篇がある。代表作『放浪記』（改造社、一九三〇）をはじめ昭和初期から流行作家として活躍した林の著作の大半は『林芙美子全集』（文泉堂出版、一九七七）に収録されている。しかし遺漏も多い。それが近年、廣畑研二『林芙美子全文業録　未完の放浪』論創社、二〇一九）によって補完された。ことに同書の「作品目録」は、丹念な調査に基づく貴重な資料である。その「【参考作品】28点〈作品の活字原紙切り抜きや直筆原稿が現存するものの、初出掲載誌や発行日不明作〉」とされた項目の「26」に、「短篇「平凡」。［新宿歴博I-357］注・内容は戦後作。掲載された広告から大阪の新聞と推定される」という記載がある。つまり初出が不明で、戦後に大阪の新聞に発表されたと推測されている。この初出が、今回の調査で確定できた。「平凡」は、「朝日新聞」西部版の一九四八年八月一日四面に掲載されていた。

同じように、従来わかっていなかった著名作家の作品の初出を確定できた例として、坂口安吾の随想が挙げられる。敗戦直後に「堕落論」（「新潮」一九四六・四）『白痴』（「新潮」一九四六・六）などを発表し、華々しい活躍をした安吾には、その文業をほぼ網羅した『坂口安吾全集』（筑摩書房、一九九八～一九九九）がある。後に『坂口安吾全集別巻』（筑摩書房、二〇一二）で遺漏も補強された（注）。この『坂口安吾全集別巻』に、「［同人雑誌の意義について］」という文章が収められ、「解題」に次のように記されている。

> 一九四七（昭和二二）年秋頃、執筆されたと推定される未発表エッセイ。タイトルは付されていない。松屋製ＳＭ印の四〇〇字詰原稿用紙三枚に旧字新字まじり旧かなで書かれている。二〇一一年一一月一五日発行の『月刊ジェイ・ノベル』第一〇巻第一二号（一二月号）の特集「心に響く百年の名作　第六回　無頼派作家の酔っぱらい座談会」に、七北数人によって原稿全文が写真掲載され、本全集において初めて収録された。

すなわち、従来の研究においては原稿しか見つかっておらず、「未発表エッセイ」だと見なされていた。ところが、今回の調査によって、坂口安吾「わが同人雑誌時代」（「朝日新聞」西部版、一九四七・一一・二四、二面）が発掘された。本文は、上記「［同人雑誌の意義に

ついて」」とごくわずかな異同しかないため、ここには引用しない。が、やはり「朝日新聞」とはいえ西部版にしか載っていない作品だったので、これまで見つかっていなかったのだと推測される。

もちろん地方版には、大阪や東京の本社に掲載された記事も載っている。しかし以上のような見逃しがたい、独自の記事もある。他にも、火野葦平ら九州在住作家の動向が映し出されていることもあれば、児童文学作家の椋鳩十が読者座談会に出席したり、読者投稿欄「声」に、鹿児島に疎開していた直木賞作家の海音寺潮五郎が投稿したりしていることもある。

そこで本稿では、さしあたり一九四六年三月から四九年一二月における西部版の学芸記事の細目を作成した。原則としてフルネームの署名記事のみを集めているが、私が興味深いと判断したものは、無署名でも掲載している。また、「聞蔵Ⅱ」で欠号になっているもの（たとえば一九四八年五月一〜一五日など）に関しては調査が及んでいないことをお断りしておく。

一九四六年

三月　二日　二面　声　共産党に与ふ　福本和夫
三月二五日　二面　歌舞伎のために　大佛次郎
四月　一日　二面　百鬼夜行の製作　ニユースでお説教はご免
映画座談会　津村秀夫、火野葦平、劉寒吉、秋山六郎兵衛、岩下俊作、山下節子
四月　三日　二面　ソ連作家の見た新日本　シーモノフ氏の寄稿
四月　八日　二面　今後の科学教育　藤岡由夫
四月　九日　二面　あなたは誰に投票しますか　大佛次郎、三遊亭金馬、林芙美子、仁科芳雄他
四月一五日　二面　文化の国〝瑞典〟尚武の国が転身した好例　渡辺紳一郎
新教科書について　有光次郎
四月二二日　二面　何処へゆく・雑誌の動向
時局雑誌　〝批判〟が欲しい　土屋精
婦人雑誌　新鮮味がない　大宅壮一
服装雑誌　今後選ぶべき道　今和次郎
四月二九日　二面　文学同人雑誌　主宰者座談会
司会の言葉　劉寒吉　語る人　文化広場　中村地平、浪漫　岩下俊作、個性　中村行利、龍舌蘭　谷村博武、鵬　小田雅彦、筑豊文学　奥平修一郎、九州文学　矢野朗、兄弟　玉井政雄
五月　二日　二面　国語と学界　あすの姿を洞察　時枝誠記
言葉について　阿部知二
五月　六日　二面　官学と私学について　完うせよ、自治と責任　南原繁（談）
これから女学校教育　藤本萬治（談）
五月　八日　二面　先づ国民の団結　上陸した鹿地亘氏　第一声をマイクへ
五月二〇日　二面　舞踊再建への方向　石井漠（談）
五月二七日　二面　戦犯者の心理　式場隆三郎
「農村娯楽の在り方」　打木村治
「共産党宣言」　江口渙
六月　三日　二面　新らしい国語　竹内照夫
六月一二日　二面　声　青年に愬ふ　海音寺潮五郎
六月一七日　二面　日本美術界への忠告　ラングドン・P・ワーナー
ソヴエートの育英施設　清川勇吉
六月二四日　二面　合理性への復帰　科学の国際舞台と日本　八木秀次（談）

戦後の俳壇　二つの流れ　栗林一石路
七月　一日　二面　民主主義文学は遠い　岩上順一
開墾　生方たつゑ
七月一五日　二面　大戦後の音楽――アメリカ音楽の進出――　近衛秀麿
牟礼雑感　武者小路実篤
宝青庵小吟　吉井勇
七月二二日　二面　あたらしい児童文化　城戸幡太郎
梅若翁の死　野上豊一郎
子供に遊びを　青木誠四郎
七月二六日　二面　声　朝鮮人の道義　張赫宙
七月二九日　二面　世界人類のために――アメリカ文学の味ひ方――　西脇順三郎
八月　五日　二面　敗戦一年・文化の歩み　清水幾太郎
読書涼風　藤森成吉・福原麟太郎・宮城音五郎
八月一九日　二面　「戦中戦後」読後　長與善郎
「長與君へ」　安倍能成
街頭の超人　ウエルズを想ふ　西村孝次
こども雑誌評　吉田甲子太郎
八月二六日　二面　日本の家のあり方　長谷川如是閑
小諸初秋　高浜虚子
芸術祭に寄せて　文化創造の飛躍台　小宮豊隆
九月　九日　二面　「右」・「左」　相良守次
大仏と観音様　澁澤秀雄
九州出版界
九月一六日　二面　日展の底流に抗争　内田巌
声　農民に直言す　海音寺潮五郎
九月二三日　二面　ホトトギス五十年　高浜虚子
短き指　山口誓子
九月二七日　二面　声　海音寺氏へ〝農民への直言〟の反響
一〇月　九日　二面　重ねて直言す　海音寺潮五郎
一〇月一四日　二面　さらば日本の楽壇　クラウス・プリングスハイム
ラジオの沈黙と革命　高橋誠一郎
一〇月二八日　二面　注目すべき作品　正宗白鳥
一一月　四日　二面　古来の軍国ではない　「丸腰憲法」に歴史の裏附　山本有三
四面　新憲法と家庭生活　我妻栄、石川達三、山本安英
憲法と文学　中野好夫

一一月一八日　二面　日本の出版界に寄す　坂西志保
　ホトトギス九州大会
一一月一九日　二面　〝どうしてる澄江さん〟中国の作家謝冰心
　女史来朝
一二月　二日　二面　学生討論会の真意義　蝋山政道
　声　新しい漢字表　保科孝一
一二月　八日　二面　声　性欲文学横行　本川吉秀
一二月一六日　二面　日本の女性へ　謝冰心
一二月二〇日　二面　声　性欲文学の可否　茂刈靖一
一二月二三日　二面　あこがれ　柳澤健
　年惜む　久保田万太郎
一二月三〇日　二面　九州の地震　伊藤徳之助

一九四七年

一月　一日　三面　ホーレー、大佛対談　フランク・ホーレー
　大佛次郎
　四面　征服できるかエヴェレスト峰　藤木九三
　日本の文化工作者に寄す　人民のため一切を　郭沫若
　文学の初春　福原麟太郎
一月　六日　二面　魂の要求　ヘルマン・ヘツセ
一月一三日　二面　新しい教育の基盤　ぬぎすてよ形式論　社会こそ優れた教室　天野貞祐
一月二〇日　二面　世相　辰野隆
　伝統破りの織田作之助　林芙美子
二月　四日　二面　底ついたヤミ用紙　出版も三月危機　書店二軒に配本一冊
二月一〇日　二面　文学も〝復興会議〟学園中心に共同研究
　世に出る園公秘話　里見弴氏が整理して出版
二月一三日　二面　〝親切な〟日本兵　東京法廷に弁護団が提出する　英国女流作家の手紙
二月一七日　二面　インフレ豪華本に断！　書物にも㊙を　物価庁取締りに乗出す
　婦人の生活と文学　宮本百合子
二月二四日　二面　大学生の政治運動　潮田江次
三月　一日　二面　声　革命の危機　海音寺潮五郎
三月　三日　二面　戦争と文明の擁護　ジョルジュ・デュアメル
三月一七日　二面　美術の春に三つの流れ
三月二一日　二面　工場に開いた文化運動展望…日鉄八幡製鉄所

三月二六日　二面　関門を描く　足立源一郎
四月一八日　二面　出版用紙割当方針きまる　雑誌の発行1／6に最高六十四頁に制限
五月　三日　二面　新憲法実施　釈迢空
五月一九日　二面　同時代について　福田恒存
五月二六日　二面　画家と経済生活　T
五月三一日　二面　トーマス・マン会見記　まだ帰郷の時でない　八年ぶり米国からスイスへ
六月　六日　二面　ペン・クラブ国際大会開く　トーマス・マンも講演
六月　七日　二面　連載小説を復活　九日から紙上に　青い山脈　石坂洋次郎作　佐藤敬画　作者の言葉
六月　九日　二面　青い山脈（1）　石坂洋次郎作　佐藤敬画
※一〇月四日、一一七回で完結
工藝品の伝統に〝活〟画家連が陶器製作に一役　竹中郁（談）　田村孝之介（談）　矢野橋村（談）　鍋井克之（談）　島野三秋（談）
六月二三日　二面　その後の疎開文化人　地方の低調さに失望　影響は残したが…少い定着者　松島記者
※井伏鱒二、大田洋子、河上徹太郎、長谷健、中村地平、海音寺潮五郎、佐藤敬、坂本繁二郎、海老原喜之助、佐藤美子、畑耕一らについて
六月二六日　二面　肉体にきざむ原子医学　長崎医大永井教授
六月三〇日　二面　職域文化の展望　探究したい新方向　多彩な日鉄、門鉄の機関誌
七月　七日　二面　古本買いあれこれ　既に古美術品の列に　トラックで売り出す財閥、作家　村岸文藝時評　敗戦苦から内省へ　平林たい子
七月一四日　二面　夏季大学に寄せて　清水幾太郎　スポーツ随想「楽しむこと」第一　辰野隆（談）
七月二一日　二面　耐乏の夏休　眞下信一　アメリカの家庭医学　坂西志保　アメリカ一の長い小説
七月二八日　二面　中学生新聞　平塚益徳
八月　四日　二面　幸田露伴先生　小宮豊隆

八月一一日　二面　アメリカ児童画について　伊原宇三郎
八月一六日　二面　中学の国語教科書にヘッセとルナール
八月一七日　二面　声　外国語の濫用　徳永直
八月一八日　二面　貿易と伝統工芸　野間清六
現代美術と文学　土方定一
スポーツ随筆　新居格
八月二三日　二面　新手、商標に登録？　漱石の作品28種　著作権がわりに遺族が申請　夏目伸六（談）
八月二五日　二面　気象と人生　伊藤徳之助
「俗な」い、映画　飯島正
八月二七日　二面　「漱石商標」著作権法の検討へ　衆院で正式に取りあぐ
八月二九日　二面　文化圏　炭鉱を主題に文化映画　加戸敏（談）
九月　一日　二面　雑誌　中野好夫
九月　五日　二面　「河童」太平洋を渡る　芥川氏の作品をタイム誌激賞
お定さん出版社を告訴　たえられぬ名誉キソン
九月　八日　二面　ユネスコと東洋文化　程天放
九月一〇日　二面　地で行く『青い山脈』　三重県の女学校で
九月一五日　二面　資料の整理が不足　社会科の教科書　坂西志保
秋を飾る文化祭典　「火の会」近く九州へ
牧水歌碑落成　十七日除幕式
九月二二日　二面　浮世絵の見方
表現に近代精神　井島勉
見逃せぬ内面的動き　亀田孜
九月二九日　二面　観光と文化　矢崎美盛
ホテルのあり方　與謝野秀
一〇月　二日　二面　次の小説　五日から　夜あけの門　尾崎士郎作　野口弥太郎画
作者の言葉
一〇月　五日　二面　夜明けの門（1）　尾崎士郎作　野口弥太郎画
※四八年二月一四日、一三〇回で完結
一〇月一〇日　二面　創作で慕う父母　戦災孤児が書いた長編小説　「良男と正三」を教材に
学者と生活
一〇月一三日　二面　生活と研究の保障　木田文夫
一つの犠牲　古賀行義
学者の妻　君島実生子

牧水の生地にも歌碑

一〇月一四日　二面　日本美術院半世紀　上　斎藤隆三（談）
一〇月一五日　二面　日本美術院半世紀　中　斎藤隆三（談）
一〇月一六日　二面　日本美術院半世紀　下　斎藤隆三（談）
一〇月一九日　二面　「火の会」の九州日程
一〇月二〇日　二面　迷いのない老大家　日展評　高見順
『アヴァン・ギャルド』のこと
一〇月二六日　二面　海を渡る日本雑誌
一〇月二七日　二面　米国のお巡りさん　坂西志保
「火の会」講演会番組
一〇月二八日　二面　さし絵の役割　石井鶴三（談）
一〇月三〇日　二面　雑誌評　『改造』九月号　西村孝次
一一月　二日　二面　トーマス・マンの大作出版
一一月　三日　二面　「火の会」を囲む座談会
一一月　五日　二面　九州吟行から　高浜年尾　星野立子
一一月　九日　二面　雑誌評　『展望』九月号　西村孝次
一一月一〇日　二面　日本の窓「九州」豊島與志雄
東京だより　絵と文　荻須高徳
「火の会」盛況
一一月一一日　二面　雑誌評　『人間』十月号　西村孝次
一一月一四日　二面　藤村記念館近く落成
一一月一五日　二面　二日間の〝漱石大学〟
一一月一七日　二面　現代の良心　ジイドに就て　山内義雄
絶望の流行　小田切秀雄
一一月二〇日　二面　秋声文学碑建つ
一一月二四日　二面　心の科学　中修二
わが同人雑誌時代　坂口安吾
城島原　草野心平
一一月二七日　二面　読書週間　吉井大阪市立図書館長（談）
一一月二八日　二面　美術　二紀会の性格　鍋井克之
一二月　一日　二面　子供の世界のボス――一女教師の記録より
――
映画的雑学　上　春山行夫
一二月　二日　二面　映画的雑学　中　春山行夫
一二月　二日　二面　映画的雑学　下　春山行夫
一二月　六日　二面　児童文学者協会の選択図書
一二月　八日　二面　文化と文部省　本多顕彰
女の専門　村松嘉津
一二月一三日　二面　雑誌評　「文藝」十一月号　西村孝次
一二月一五日　二面　二つのヒューマニズム　高桑純夫
一二月一六日　二面　雑誌評　「新潮」十一月号　西村孝次
一二月一九日　二面　負数の子供　安西冬衛

一二月二二日　二面　世界の阿蘇　中島健蔵
今年の収穫　岩崎昶
一二月二九日　二面　荒廃の日本に新風　再び来た大詩人　イギリスの誇り担つて
アメリカばやり　福原麟太郎
一二月三一日　二面　ボクは百円札

一九四八年

一月　一日　二面　敗戦日本に与える言葉　トーマス・マン
三面　新春譜　北川冬彦
停年の春　辰野隆
今年の計画　志賀直哉　仁科芳雄　岡鹿之助
一月　三日　二面　昭和百年の夢　娯楽風俗編②　東郷青児他（談）
今年の計画　宇野浩二　中谷宇吉郎
一月　四日　二面　今年の計画　岡本太郎
一月　五日　二面　戦争と青年　アンドレ・ジイド
昭和百年の夢④生活編　前川國男　石川栄耀　清田文永（談）
今年の計画　藤原義江　石坂洋次郎
一月　六日　二面　昭和百年の夢⑤教育編　羽仁五郎他（談）
今年の計画　近衛秀麿
一月　七日　二面　伸びる郷土人①〝我が道を行かず〟の弁
ソプラノ・三宅春恵さん
一月　八日　二面　伸びる郷土人②世界へ通ずるロマンの創造
作家・梅崎春生氏
一月　九日　二面　伸びる郷土人③新しいバレーの創造　舞踊家・貝谷八百子さん
一月一一日　二面　伸びる郷土人　終　直視する日本の現実
評論家・花田清輝氏
一月一九日　二面　終戦後の日本の芝居　河竹繁俊
雑誌評　「進路」「文藝」一月号　大木卓
一月二〇日　二面　文化圏　買われた世代の感覚　新進作家・北川晃二氏
一月二五日　二面　声　情痴文学　和田滋喜
一月二八日　二面　声　暦の改革案　姉崎正治
二月　二日　二面　毒薬と犯罪
二月　五日　二面　無断翻訳に罰金旋風『凱旋門』に廿万ドル　著作権侵害におびえる出版界
二月　九日　二面　「青年劇場」について　河原崎長十郎
日食雑記　伊藤徳之助

二月一五日　二面　私は見た（1）　藤沢桓夫作　小磯良平画
※七月八日、一四四回で完結
二月一六日　二面　文部大臣九ヶ月　森戸辰男
二月二三日　二面　新学制あれこれ　教育革命のヤマ　今年は大切な年
三月　一日　二面　現代のイギリス作家　エドマンド・ブランデン
春の小品　エドマンド・ブランデン
三月　八日　二面　スタインベック版　パリ春のモード
立派な往生　菊池寛氏をおもう　今日出海
偉大な常識家　吉川英治氏談
三月一五日　二面　弥生式文化の話　駒井和愛
三月二一日　二面　林房雄氏ら追放　著述家二百七十仮指定
三月二九日　二面　北斎と現代　近藤市太郎
三月三〇日　二面　火野葦平氏ら六一名　ペンの追放一まず終る
四月　二日　二面　声　婦人の日　平林たい子
四月　五日　二面　日食の意義　荻原雄祐
四月一九日　二面　学園と恋愛　徳永ヨシ
四月二六日　二面　音の街　宮城道雄
五月二一日　二面　店を開いた国会図書館　〝ないないづくし〟で嘆く館長さん
五月二四日　二面　新興出版社の昨今　小池
五月三一日　二面　ブギ・ウギ時代　兼常清佐
ゾラの生涯　大佛次郎
六月　七日　二面　現代中日版画展について　平塚運一
六月一一日　二面　廣田先生の書斎再建　遺愛の万巻で「岩元文庫」
六月一五日　二面　太宰治氏、婦人と家出
六月一六日　二面　流行作家太宰氏　情死か
悩んでいた　豊島与志雄（談）
六月一七日　二面　太宰治はなぜ死んだか　夫人や友人にきく
六月二〇日　二面　太宰氏の死体発見
声　太宰治の死　松野久男
六月二一日　二面　太宰君の死　中野好夫
グッド・バイ　太宰治　吉岡堅一
六月二七日　二面　全波　ニワカ太宰ファン
六月二八日　二面　授業料と大学の財政
七月　五日　二面　大地震の後に来るもの　和達清夫
文藝「人生は別離だ」　沢

七月　七日　二面　次の連載小説「人間復活」船山馨作　木下孝則画
　作者の言葉
七月一二日　二面　官展廃止説の内情　高松
　夏に行く＝北海道＝　星野立子
　浪人白書　都留重人
　「人間復活」（1）　船山馨作　木下孝則画
　※一〇月一〇日、八〇回で完結
七月一九日　二面　対馬の考古学的調査　森貞次郎
七月二〇日　二面　雑誌評『現代俳句』六月号　大木卓
七月二三日　二面　雑誌評『中央公論』　大木卓
七月二六日　二面　カトリックの現況
　星と踊る少女　八木隆一郎
七月二八日　二面　雑誌評『胎動』七月号　大木卓
八月　一日　四面　宗教は現代の不安を克服できるか　対談
　鈴木大拙　赤岩栄
　『セップン』について　獅子文六
　おせっかい評論　河竹繁俊
　その時その人　菊田一夫氏　清水崑
　コント「平凡」　林芙美子
　ラジオ評　久保田万太郎
　雑誌評『批評』六一号　大木卓
八月　八日　二面　その時その人　高橋誠一郎氏　清水崑
　四面　座談会　人間はなぜ自殺するか？　堀見太郎・山元一郎・三好達治
　地震予知のこと　伊藤徳之助
　ジュネーヴより帰りて　東竜太郎
八月一二日　二面　文学　志賀直哉への反逆　吉
八月一四日　二面　雑誌評『新潮』七月号　大木卓
八月一五日　四面　夏に行く　丸山正三絵　石塚友一句
　昔ばなし――中等野球の思い出など――
　三好達治
　浮世談義　日本文化の行方　宮沢俊義
　ユネスコ運動について　平和への理性
　湯浅八郎
八月一七日　二面　雑誌評『朝日評論』七月号　大木卓
八月一八日　二面　声　新しい大学院　末高信
八月一九日　二面　文化人が見た最近のソ連　亡命、抑留13年の淡徳三郎氏談
八月二二日　二面　国語の読み書き能力調査　解説
　年号　桑原武夫
八月二九日　二面　生きることの良さ　人間の善意を信じる聖

女　壽岳シヅ
社会時評　民主化最後の防壁を守れ【本庄事件について】　清水幾太郎
金魚　内田恵太郎
九月　五日　四面　〝可能性〟の音楽　兼常清佐
百二十三本目の草　田村一二
塚田名人・升田八段対談会
検定済教科書をみる　坂西志保
九月一二日　四面　正しい性教育とは　伊藤嘉奈太・三谷十糸子
日曜コント　転出入　土岐雄三
バクチの流行　大内兵衛
九月一七日　二面　科学　白なまずの新療法　梶本政治
九月一九日　四面　血族結婚の背景　木田文夫
九月二三日　二面　雑誌評『改造』八月号　大木卓
九月二四日　二面　声　文学愛好者　山本泰子
九月二六日　四面　働く者の闘い　上林貞治郎
裸一貫の幸福　石田憲次
『デボミツ』のこと　小宮豊隆
このごろの婦人雑誌　森田たま
文芸時評　青野季吉
読書の秋　諸家推薦　寒川光太郎・田村泰次郎・松村一人・高橋庄治
一〇月　二日　二面　新聞を語る　本社主催読者座談会　安部恕　市川季熊　青山道夫　福田昌子　織田定信　久保田彦穂（椋鳩十）
一〇月　三日　四面　顔　帝銀事件によせて　荻野盆三郎
婦唱夫画　ゴム長靴　赤松俊子唱　丸木信里画
一〇月　九日　二面　次の連載小説　地底の歌　平林たい子作　吉岡堅二画
作者の言葉
一〇月一〇日　二面　外人教師を招け　田中耕太郎
四面　科学的に学校診断　アメリカの教育委員　吉武弥生
日曜コント　美しきハネ　土岐雄三
政党の堕落　転り出た公然の秘密　政治家の不潔と無力　中島健蔵
名人対升田戦　水鳥の足　岡本一平
〝天国の愉悦〟の実体　大宅壮一
一〇月一二日　二面　地底の歌（1）　平林たい子作　吉岡堅二画　※一二月三〇日、八〇回で完結

一〇月一七日　四面　婦唱夫画　調度品　小川マリ子唱　三雲祥之助画
素人のど自慢　天下御免のウヌボレ・スター　岩崎修
一平をしのぶ　画と文　藤田嗣治
アメリカ芝居登場　東劇十月見物記　佐野学
一〇月一八日　二面　声　新聞小説の在り方　高橋克章
一〇月一九日　二面　地底の歌　東京編二題
一〇月二二日　二面　日仏共同で映画製作　コクトオ氏ら近く来朝
尾上菊五郎（談）
一〇月二四日　三面　「グッドバイ」映画化
四面　余技自賛　私の夕食　中村研一
映画「王将」雑感　塚田正夫
一一月　一日　四面　エロチックの限界　文芸、風教、ウソ
獅子文六
余技自賛　「はじかき」の弁　市川海老蔵
菓子折の如き日本画　日展評　福島繁太郎
あいのこ言葉　石崎正
一一月　三日　二面　「文の林を茂らしめばや」　天皇陛下の御近詠　五首
一一月一四日　二面　声　新聞と文化の指導　渡恭一
一一月二一日　四面　余技自賛　しかられる月曜日　絵と文　猪熊弦一郎
ユネスコの月　伊藤徳之助
変る風俗・変らぬ風俗　安西冬衛
むかしといま　秋野不矩
一一月二七日　二面　文藝　「最後の切札」　増野正衛
一一月二九日　二面　時の問題　縦横批判②　対談会　向坂逸郎　笠信太郎
一二月　二日　一面　トーマス・マンと語る　ニューヨークにて　高野特派員発
一二月　四日　二面　命かけて六十七歳の恋　歌人川田順、人妻と家出　京の寺で死を覚悟
一二月一二日　四面　湯屋　日展　三谷十糸子
サンタ・クローズ　中村恒夫
老人と恋愛　しゃれたこと　竹友藻風
夕映えの恋に勝利の日　川田順、結婚を決意　〝再生の大手術だった〟
一二月一五日　二面

一二月一九日　四面　〝極地法随感〟　藤木九三
アルコールの仕業　林醁（木々高太郎）
琴・三味線に何を期待する？
海外進出！　宮城道雄
博物館へ！　兼常清佐
一二月二四日　四面　社会時評　今年を省みて　清水幾太郎
荒かせぎ付録合戦　一年分の利益めざす正月号　木村
一二月二七日　二面　雑誌評「個性」十二月号　大木卓
一二月二九日　二面　次の小説　花の素顔　舟橋聖一作　猪熊弦一郎画
作者の言葉

一九四九年
一月　一日　三面　花の素顔（一）　舟橋聖一作　猪熊弦一郎画　※六月二四日　一七二回で完結
四面　童話　牛おどり　藤澤桓夫
窓　土岐善麿
一月　三日　四面　細雪について　谷崎潤一郎（談）
〝紫式部以来だ〟　辰野隆博士談
童話　春を待つ子供　泉田行夫
星月夜または人類の行方　宮沢俊義
一月　六日　二面　雑誌評『心』一月号　大木卓
一月一二日　二面　西鶴〝五人女〟を英訳　東大留学の米学生
一月一三日　四面　プリンストン通信　集る世界一流の学者
強い刺激、静かなふんいき　湯川秀樹
絵を観るには　植村鷹千代
一月一五日　二面　九州小説、詩人賞作品募集
一月二二日　二面　長崎の鐘英訳豪華版
一月二六日　三面　雑誌評　朝日評論（一月号）　大木卓
四面　日本の若返り＝数え年から満年齢へ＝
宮田重雄
ゆきもどり民主主義　原随園
わたしのゆめ　日本映画の国際進出　大沢善雄
エリオットの新著　N
婦人雑誌のページ数
一月二九日　二面　記録文学募集
一月三一日　二面　平和メッセージ　文豪トーマス・マン　アインシュタイン博士
浄土変　吉井勇
法隆寺グループを排す　山下新太郎

二月　二日　二面　婦人クラブ二月号発売停止
二月　八日　二面　雑誌評　中央公論（一月号）　大木卓
二月一三日　四面　国歌「君が代」をどうする
　存置論　このまゝで　田中耕太郎
　戦犯性はない　坂西志保
　妥当な名曲　堀内敬三
　反対論　国歌は不要　林健太郎
　古い帝王観　中野好夫
古いものの意味　モゝの節句考　柳田国男（談）
風の子と「庵主」　山本映佑
二月一七日　四面　「幸運の手紙」をキル
反ナチ運動で流行　発案はバーナード・ショウ　鶴見俊輔
むしろ〝悲運の手紙〟ばからしいいたずらだ　内田百閒
息詰るのがオチだ　坪井忠二
脅迫に等しい　辰野隆
二月一九日　二面　墓前に捧ぐ日本文学研究　エリザベス・マッキンノン（談）
二月二〇日　二面　雑誌評　世界文学（二月号）　大木卓
二月二一日　二面　雑誌評　世界文学（二月号）　大木卓
三月　六日　四面　本紙記者　トピック座談会　日本文化を動かす人々
三月一三日　四面　戦争は永久に棄てよう！　世界へ平和声明
　日本の科学者立上る
信じたい〝理性と善意〟　川端康成
隣人愛もて　長谷川如是閑
面会日　小林秀雄氏　門
三月一四日　二面　赤ん坊と私　笠置シズ子
三月二〇日　二面　声　漢字とかな　高口道雄
四面　将棋名人戦を前に　升田幸三
東京イソップ　絵と文　佐藤敬
面会日　安井曾太郎氏　高
三月二七日　四面　検事・作家・労働者　ボス追放座談会
立石幸夫　森田保雄　岩下俊作
書評　孤悶と苦悩　戸川行男
四月　二日　二面　雑誌評　人間（三月号）　小説新潮（第四号）　大木卓
四月　五日　四面　「春魚」の『恋愛』　上野盆三
国展に出す私の作品　絵と文　梅原龍三郎

性の教室　流行する『結婚手引書』米国に現れた最近の傾向　池田昌夫
歌集『幸木』　坪野哲久
96ページ時代　今日の総合雑誌論　大木卓

四月一〇日　四面　日本映画女優論　北川冬彦
わたしの絵　絵と文　三雲祥之助
失はれた作家の自信と自負　文藝時評　北原武夫
大人の社会科　カブキの見方　河竹繁俊
どちらも改善運動　日本の漫画・アメリカの漫画　ＳＣＡＰ・ＣＩＥ　大阪図書館　西藤壽太郎

四月一七日　三面　出版界・総倒れの恐慌！　相つぐ廃、休刊　老舗も近作に飛回る

四面　日本の青年・戦前、戦後　伝統見捨てる〝進歩〟熱狂性が生む粗雑な思想　トーマス・ライエル

四月二一日　二面　稿料不払いに作家泣く　正宗白鳥も集金回り　貸し倒れのサシ絵画家
高すぎる稿料　櫻菊書院「小説と読物」編集長　伊藤啓二氏談

四月二四日　四面　学びたい　底にひそむ人道　引揚の思い出から　笠信太郎
ショパン一〇〇年祭に寄せて　増沢健美
展覧会サッパリ　春の画壇報告　高

五月　三日　二面　「花の素顔」を地で行く　洋裁店のマダムが家出　夫は佐野繁次郎画伯を訴う　血迷ったとしかいえぬ　佐野画伯
筋書を追う現実　不思議な一致に驚く　舟橋氏談
夫はサディスト　正子さんの話

五月　八日　四面　わが交響楽団の現状と将来　紙上座談会
日比谷留学3年　珍しいＣＩＥ図書館　困るのは多い盗難　坂西志保
コケおどしの表紙絵　最近の雑誌　花森安治

五月一三日　二面　海外　トーマス・マンの新作問題

五月一五日　四面　世界連邦政府　人類の破滅防ぐ道　「世界憲法」の草案も練る　谷川徹三（談）
水郷詩　深尾須磨子　福田与四郎画
右側通行か左側通行か　藤岡長敏

パリで北斎百年祭　演劇、映画見てある記　荻須高徳

五月一八日　二面　雑誌評　文藝（五月号）　大木卓

五月二〇日　二面　雑誌評　文藝首都（五月号）　大木卓

五月二二日　四面　「世界の知識人」会見記　アインシュタイン博士の巻

武将の前で洋楽を演ず　秀吉の魂を奪った伊東満所ら　サヴィエル余録　黒沢隆朝

五月二三日　二面　サヴィエルを語る　カンドウ神父

五月二四日　二面　マダムから離婚提訴　「花の素顔」の洋裁店マサコ

五月二六日　二面　〝平和〟に注ぐ全印税　長崎国際文化都市の建設へ　永井隆博士の熱願

五月二八日　二面　陛下、永井博士をお見舞　『著書は読みました』付添いの二児もお励し

記録文学、エロを打倒す　だが警戒すべき過去への郷愁

五月二九日　四面　世界の知識人　モーリアック

宝くじ解剖学　福田治郎

囚人の短歌　狩野満

社会時評　精神の自殺者　戒能通孝

行詰った日本映画　〝愚作〟横行時代　『泣いて下さい』にお客は飽く　井沢

ひととき　松岡洋子

五月三一日　二面　〝私の力も右手だけ〟　永井博士「聖腕」に口づけ

六月　三日　二面　「門司の詩」贈らる　英の詩人から

六月　四日　二面　詩魂こめた校歌　ブランデン氏、関学に贈る

雑誌評　文藝春秋（六月号）　大木卓

六月　六日　二面　こんどは火野氏が邦訳出版　ブッシュ氏の短編「銭湯の夜」

六月一一日　二面　将棋　対局場のよしあし　升田幸三

六月一二日　四面　「教育綱領」を作るというが

出発点から間違い　安倍能成

余計なものだ　福原麟太郎

よいことだと思う　谷川徹三

藝術家も含めよ　辰野隆

一応はよいだろう　大内兵衛

教育基本法で十分　坂西志保

立場がわからぬ　小泉信三

四国路の巡礼　絵と文　野間仁根

世界の知識人　ベネデット・クローチェ
将棋　延びる持時間　升田幸三
六月一六日　二面　声　大学のヒンイ　魚返善雄
六月一九日　三面　次の小説　宗方姉妹　作者の言葉　大佛次郎
四面　世界の知識人「凱旋門」のレマルク氏
「デー・デー」に寄す　幸田文
婦人雑誌いまや傷だらけ「浮気読者」に戸惑う
記録と虚構　丹羽文雄
書評「ミレエ」　須田国太郎
六月二〇日　二面　書評「インパール」　藤沢桓夫
六月二二日　二面　書評　流れる星は生きている　藤沢桓夫
六月二五日　一面　宗方姉妹（一）　大佛次郎作　生沢朗画
※一二月三一日、一九〇回で完結
花の素顔　映画化
六月二六日　四面　世界の知識人　ボール・クローデル
明日の文化界に期待する
文学　本格的な〝ロマン〟大衆文学に
落ちてはならぬ　豊島與志雄
詩　〝学生に期待する〟　三好達治
思想　現実に立脚せよ　高桑純夫
美術　人間的に立直れ　教えられる梅原、安井展　伊藤簾
「美しき本能」後感　木原行男
七月一〇日　四面　夜振り　獅子文六
七月一六日　一面　雑誌評　素直　大木卓
七月一七日　四面　アメリカ漫画　池田昌夫
余滴「花火線香の夢」　佐々木重雄
想い出の夏　パリ　絵と文　野口弥太郎
菊五郎を憶う　中村吉右衛門
ブック・ガイド　渡辺慧著「未来を目指すもの」　伏見康治
七月一八日　一面　雑誌評　新潮（七月号）　大木卓
七月二四日　四面　思想と実生活　合法性と正統性について
宮沢俊義
アロハ談義　堀内敬三
文芸　批評家と作家　E
七月三一日　四面　マ元帥と会って　潮田江次
数学者の日本観　小倉金之助
朝日歌壇　斎藤茂吉選　選者の言葉
八月　五日　二面　ヒロシマ　一九四九年八月六日に寄するう

た　エドマンド・ブランデン作　壽岳文章訳

八月　六日　二面　広島・長崎　声で結ぶ平和　永井隆　小倉豊文

八月　八日　二面　海戦記ものに一矢「愛宕」元主計長今村氏（談）

八月　九日　一面　雑誌評　文藝春秋・個性（八月号）　大木卓

八月一六日　四面　女性時評　美しくなった「働く女性」　宮城音弥

引揚者の顔――舞鶴からの車中にて――　丹羽文雄

夜の窓際　北川冬彦

八月一七日　一面　雑誌評　新小説（八月号）　大木卓

八月一九日　四面　新文学を待つ　出版編集者匿名座談会

東京復興見物　獅子文六

八月二〇日　四面　〝新しがり〟ぎらい　映画と伝統について　小津安二郎（談）

大人の社会科　ヒロポンとアドルム

文藝　幸福の位置＝大原富枝　沢野

余滴　嫁のしゅうといびり　家永三郎

八月二一日　四面　移りゆく欧米文化　本社通信員紙上座談会

八月二七日　四面　描かせ放題が上達の因　児童水彩画展

猪熊弦一郎

随筆『鳥』　内田清之助

〝眠る社会科教育〟　戸川行男

写生語　大西稚雄

九月　五日　一面　雑誌評　中央公論（九月号）　大木卓

二面　次の名人はたれ？　将棋界の現状

九月　六日　一面　日本見たまま③信州の流し火　S・カンドウ

九月　八日　一面　日本見たまゝ⑤小豆島の巻　グレン・ショウ

ショウさんのこと　三谷十糸子

九月一〇日　一面　日本見たまゝ⑥大峰山の巻　グレン・ショウ

九月一一日　一面　日本見たまゝ⑦飛騨・美濃の巻　グレン・ショウ

四面　アメリカさまざま　生活と文化　佐々学

網島毅　横田巌

〝自由と創造〟見失う　院展、青龍社評

田中一松

学界余滴　極微の世界へ　瀬藤象二
九月一三日　一面　日本見たまま⑨広島の巻　文　ノラ・ウォーン　写真　C・P・ゴリー
九月一四日　一面　日本見たまま　終　長崎の巻　C・P・ゴリー
九月一八日　四面　私も金詰り　藤原義江　松本幸四郎　伊原宇三郎　石塚友二
九月二五日　四面　老ガリバー旅行記　大内兵衛
文学者、やはり〝日本の良心〟今月の雑誌から　河盛好蔵
九月二六日　一面　雑誌評（九月号）　大下卓
九月三〇日　二面　恋にもつれた『鐘の鳴る丘』人妻女優が家出　菊田一夫氏訴えらる　菊田一夫（談）　猪俣四郎（談）　猪俣明子（談）　福田こと子（談）
一〇月　一日　二面　新聞に何を希望する　向坂逸郎　中島健蔵　大塚万丈　高野信　笠信太郎
四面　昔の新聞記者気質　秋山安三郎
一〇月　四日　二面　新聞の使命　偉大なる新聞人　スコットのことなど　笠信太郎
四面　文楽放談　吉田文五郎　山城少掾、鶴沢清六
老ガリバー旅行記　ロンドン塔に漱石のネコを想う　大内兵衛
ハラキリ　池田亀鑑
一〇月　九日　四面　「九州文化」放談　伊藤徳之助　火野葦平　劉寒吉　木下邦子　君島逸平
一〇月一〇日　一面　雑誌評　展望（十月号）　大木卓
一〇月一六日　四面　社会時評　変らぬ人情と古川柳　前田雀郎
「フィガロの結婚」を見て　進藤誠一
ポーの百年忌に　江戸川乱歩
雑誌評　世界春秋（創刊号）　大木卓
一〇月二三日　四面　労働組合の文化運動　盛んな映画製作熱
人気ある文学サークル
藤原歌劇団について　増澤健美
一〇月二四日　二面　同じ作品を二雑誌に　田村泰次郎作「愛の構図」が問題化
一〇月二九日　二面　文化勲章に七氏を推薦　谷崎、志賀、津田氏　科学陣・岡田、三浦氏ら
一〇月三〇日　四面　四〇〇字小説特集
流年　梅崎春生

動物園　芝木好子
恋文　三島由紀夫
六分間　北畠八穂
木の葉　白川渥
文化の日に寄せて　高田保
米国の近代美術館　中村恒夫

一一月　五日　二面　日本の科学界に寄せる＝湯川秀樹博士を囲んで＝　湯川秀樹　大谷節夫　角田柳作　井上覚太郎
三面　田中英光氏が自殺　太宰治の墓前で
四面　パリと北海道　ユネスコについて　清水幾太郎
観画放言　日展から　三好達治

一一月　八日　一面　雑誌評　新潮（十一月号）　大木卓

一一月　九日　三面　文楽少掾清六さやあての段
四面　両陛下にお会いして　須磨みち子
日本人に言いたいこと
まず古代文化を学べ　俳句と川柳　R・H・ブライズ
手近にある「有益な仕事」　女性と生活
グラディス・ミラー
余滴　固有名詞の整理　吉田澄夫

一一月一三日　四面　日米夫人が手紙交換　パール・バック他
余滴　上野陽一

一一月二〇日　四面　戦後の写真界を観る座談会　金丸重嶺
永田二甕　小野由行　川崎洵男
魅惑的な黒色のキモノ　外国婦人が見た日本人のモード　ユレー女史
余滴　タタミ敷の便所　岸田日出刀
優れたワキ役陣　映画男優論　北川冬彦

一一月二三日　一面　雑誌評　日本評論（十一月号）　大木卓
雑誌評　モダン日本別冊（第一号）　大木卓

一一月二五日　一面　『夕刊朝日新聞』創刊
小説　佐々木小次郎　村上元三　画木下二介　作者の言葉
漫画　清水崑
さざえさんの言葉　長谷川町子

一一月二七日　四面　わが独身の弁
おかげで達者　余生は藝術と読書で
高橋誠一郎
〝一人もまた忙し〟　家庭的責任のないの

が幸せ　坂西志保
売れっ子作家三人　雑誌新年号の企画のぞく
余滴　ネズミの愛情　鵜上三郎
素直に画いた良さ　勤労者美術展　田辺憲三
服装教室　友井唯起子
一二月　一日　一面　書評「コミンテルンの密使」（近藤栄蔵著）　石山慶治郎
一二月　二日　四面　六八歳の情熱　パピーニ氏と会見
一二月　四日　四面　一九四九年の回顧　演劇　科学　教育
余滴　しばれる　清水重道
広告放談　画と文　岡鹿之助
ラ・マルセイエス号　美術の国の船を見る　小磯良平
一二月　八日　三面　絹代さんのアメリカ便り
四面　楽壇今年の回顧　増沢健美
服装教室　水谷八重子
一二月一一日　四面　『青い目』にうつゝた日本の油絵　ウォルター・タング　ロゼッタ・T・カドウェル　メリー・キング
服装教室　梶原三郎
一二月一二日　四面　米書一五〇〇冊の贈物　ロックフェラー財団から初荷　国会図書館は洋書のインフレ
永井博士起き上る　主治医が近く病状報告
一二月一五日　四面　衣装教室　田村孝之介
夕刊論　八木秀次
一二月一七日　二面　書評　故人今人　池田成彬述　徳川夢声
ノーベル賞を受けて　湯川博士　福井特派員　対談
一二月一八日　四面　父首相の読書　吉田健一
衣装教室　島津愛子
書評　源田御学生の性行動　朝山新一著　村岡花子
一二月二五日　二面　講和方式と安全保障　専門か調査三氏の回答全文　長谷川如是閑　工藤昭四郎　津田左右吉
一二月三〇日　一面　次の連載小説　七色の花　中山義秀作　井原宇三郎画　作者の言葉

注

『坂口安吾全集別巻』刊行後に見つかった作品として、前述の拙稿で発掘した「復員」（「朝日新聞」大阪版、一九四六・一一・三、四面）や、本多俊介氏が発掘した「織田の死」（「時事新報」一九四七・一・一二）がある。また、本稿と同じように未確認だった初出発表媒体を明らかにした例として、拙稿「【研究ノート】安吾・新興紙・棋戦―「坂口流の将棋観」「観戦記」の初出をめぐって」（「坂口安吾研究」二〇一六・三）がある。

【附記】本研究はＪＳＰＳ科研費17K02450および20K00346の助成を受けたものです。

"The Asahi Shimbun", Western Edition, A List of Cultural Articles (March 1946 - December 1949)

Masao SAITO

This paper is a list of the titles of the cultural articles and their authors published in the western edition of "The Asahi Shimbun" from March 1946 to December 1949.

Japan was in a severe shortage of various commodities during the period from World War II to the occupation. Newspapers were also compelled to reduce the number of pages due to the shortage of paper, and during 1946, newspapers were generally published with only two pages. As a result, a lot of content was deleted. In the chaotic times, information related to clothing, food, and houses was given priority in the newspapers. On the other hand, articles about culture were less likely to appear in the newspapers. With the case of "The Asahi Shimbun", the serialization of novels was suspended on March 6, 1945. The revival of serialized novels had to wait until June 8, 1949 (June 9 in the Western Edition).

However, this did not mean that the cultural articles had disappeared from the newspapers. The articles were smaller and shorter though. But it was definitely published. In the immediate aftermath of Japan's defeat, there was a growing momentum to become a "Cultural Nation". Many people were also looking for content other than politics, economics, and society.

The Western edition, which I am focusing on in this paper, shared many articles with the Tokyo and Osaka editions. However, other articles too were included. The articles that appeared only in the regional editions were difficult to find. This time, I have used "Asahi Shimbun Article Database Kikuzo II Visual" as my research material. Although this database is equipped with a search function, many missing articles are also there. For instance, even if one may find an article that was published in the Tokyo edition, but may not find the one which was published in a regional edition. However, many important articles and good works were published in the local editions. Many works of famous authors with detailed bibliographies were also overlooked, even if they were published in a well-known newspaper "The Asahi Shimbun". For example, the works of Fumiko Hayashi, Ango Sakaguchi, Ashihei Hino, Hatoju Muku, and Chogoro Kaionji, and so on.

In principle, this paper includes only those articles which have full signatures. However, I have included some unsigned but interesting articles, too.